

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第 20 号 (令和元年 6 月)

- ミドリ 「今日は、“でわのはごろもななかまど”
をじっくり見るのね。」
- あゆむ 「また、“こくそうざん虚空蔵山”に登るんだな。」
- ふみお 「うん。この前は、“たかだてじょうあと高館城跡”を中心に
見て帰ったからね。」
- あゆむ 「それにしても長ったらしい名前だな。」
- ミドリ 「あら、すてきな名前じゃない？」
- ふみお 「“ななかまど”は少しわかるけど…。」
- ミドリ 「秋になると、こうよう紅葉してきれいだし、赤い実
もなるわね。それで、“でわのはごろも”
というの？」
- ふみお 「“でわ”というのは“でわの国”のことかな。」
- あゆむ 「それ、どこの国？」
- ふみお 「昔、山形県と秋田県にあたる地域をでわ出羽
の国と言ったんだよね。」
- 文じい 「そう。ここで見つかったので“出羽の地域
の”ということから“でわの”となった。
問題は、“はごろも”じゃ。」
- ミドリ 「てんにょ天女が、“はごろも”を着て天に帰って行っ
たという昔ばなしがあったわね。」
- 文じい 「ふむ、確かにそういうでんせつ伝説があるが、その
“はごろも”は“はごろも羽衣”という字なんだが、羽
のように切り込みがある感じなのと、葉を



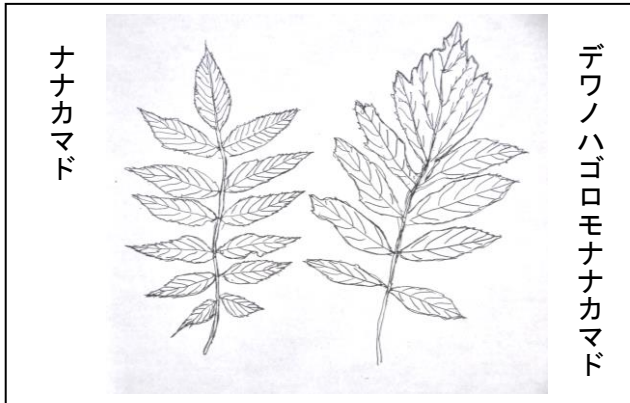
でわのはごろも ななかまど

- つづり合わせた衣 “はごろも葉衣”という字も当て
はまるのではないかと思うのじゃ。」
- ふみお 「どっちにしても、葉にそのなぞ謎がかくされて
いるということだな。」
- あゆむ 「なに？ なぞ？ これはおもしろくなって
きたな。それじゃあ、急いで登ろう！」
- ミドリ 「ふう。もうちようじょう頂上近い所よね。あっ、見えた。」
- ふみお 「石柱だ。昔の字で、“ごしんぼく御神木 でわのはごろ
もななかまど”と彫ってあるんだよね。」
- ミドリ 「さく柵の中にもひょうちゆう標柱があるわ。けんしていてんねんきねん県指定天然記念
物と書いてある。」
- あゆむ 「さあ、なぞだよ、なぞ。葉っぱを見るんだ
ったな。うーん、でも高くではっきりは見え
ないな。」
- 文じい 「そうがんきょう双眼鏡を持ってきた。これで見てみよう。」
- ミドリ 「あ、なるほど。どれどれ…。葉ははっきり
見える。でも、これが何なの？」

文じい 「フフフ。次の図を見れば、
謎がわかる。」

- ふみお 「あっ、葉の先の部分がナナ
カマドとちがう。小さい葉
が合わさってしまったよう
な感じになっている。」
- ミドリ 「あ、そうか。葉をつづり合
わせた葉衣というわけね。」
- あゆむ 「ふうん、それでなぞときは
終わりか？」
- ふみお 「いやいや、そんな葉を持
つ木がこれまではたしてこ
の世に見つかっているのだ

ろうかということになるよね。」



文じい 「ふむ。最初に発見した、当時の上山農業高等学校(今の上山明新館高等学校)の伊藤 弼郎先生は、当時の山形中学校(今の山形東高等学校)の植物にくわしい結城嘉美先生にみてもらった。昭和7(1932)年じゃ。」

あゆむ 「それで、わかったの？」

文じい 「いやいや、結城先生もわからず、今度は、京都大学の小泉純一先生に聞いてみた。そうすると、親戚になるような似た木はあった。岩手県の陸中の国で植物学者の牧野 富太郎博士が昭和4年に発見した“リクチュウナナカマド”や、京都の“ヨサノハゴロモナナカマド”があることがわかった。」

ミドリ 「そうか、新発見ではなかったわけだ。」

文じい 「ふむ。そうなんじゃが、こういう種類が交じり合ってできたようなもの、つまり自然交雑種は、一代限りで滅びる運命にあるものが多い。それで、今生きているのは、この上山で見つかったこの木だけとなっているらしい。」

ミドリ 「あら、じゃあ今ではこの木が代表になって、こういう種類の木の名前は“でわのはごろもななかまど”となっているわけね。すごいね。ところで、だれがこの名前をつけたの？」

文じい 「小泉先生が、“デワノハゴロモナナカマド”と名前を付けてくれた。でも、正式な和名つまり日本語の名前は、“リクチュウナナカマド”となっている。“デワノハゴロモナナカ

マド”は、異名つまり別の地域の別の名前ということになってしまった。」

ミドリ 「え？ 現在でも残っている木なのに？」

ふみお 「“リクチュウナナカマド”の方が早く発見されて名前が付いたからかな？ 陸中の木は昭和4年、この木は昭和7年だからな。」

あゆむ 「3年だけの違いで代表の座をうばわれたのか。」

ミドリ 「サッカー選手みたいなことを言うわね。でも、昭和27(1952)年に、“でわのはごろもななかまど”として天然記念物に指定されたのね。この木の親は何の木なの？」

文じい 「片方は“ナナカマド”ということは検討がつかないが、もう片方はウラジロノキということが多くの方のご苦労によってようやくわかった。その葉がこれじゃ」



ふみお 「でも、この辺りを見回しただけでは、それらしい木は両方とも見えないね。」

文じい 「ウラジロノキはこの山で見つけられたが、ナナカマドがなかなか見つけられない。それでも、数km内にはあるもので、虫によって花粉が運ばれたりもするらしいから、間違いないと言っておられる。」

ミドリ 「ところで、この木の子や孫はできたの？」

文じい 「当時の上山高等学校(今の上山明新館高等学校)の吉田茂男先生たちが、実から育てるのに成功したんじゃ。今では多くの方が育てている。この木も発見した時は、高さが2mほどだったようだが、今は7.5mほどと成長は遅いものの、がんばって生きておる。」

ふみお 「そうか。貴重なこの木を成長させ、増やして、研究を続けていきたいね。」